

日本における会社名の変遷に関する考察

—— カタカナ語使用を中心として ——

加藤 早苗

キーワード： 会社名 カタカナ語 外来語 社名構成 使用語種

1 はじめに

本来、会社名とは社名を名乗るだけで何を製造している会社であるかがわかり、社名が商品の宣伝も兼ねていた。しかし、昨今のカタカナ時代の影響を受けてか、漢字社名が定番であった銀行や創業何十年と続いている歴史のある企業に至るまで、カタカナ名やローマ字名に社名変更をしているのが現状である。その結果、社名（主にカタカナ社名やローマ字社名）から商品が連想できない状態、つまり、受け手に情報が正しく伝わらないという障害が起きている。

会社名におけるカタカナ語の変化に注目した研究は少なく、生島（1973）^(注1)の製造業の分析と林（2000）^(注2)の会社名の表記変遷をピックアップしたものがあるのみである。さらに、先行研究では調査範囲が限られていたこと、調査対象が一貫していないこと、社名形態の変化から分類方法が適当でなくなったという不具合が生じていることから、本論では調査範囲を東京株式取引所発足の明治初期（1878年）から平成初期（2004年）にまで広げ、対象を東京証券取引所上場1部に限定し、日本語学の観点から会社名を分析し、その変遷の解明を試みる。なお、カタカナ社名については、その典型的な社名変化を示す繊維業に焦点をあて、語種、意味内容、使用方法について論述したい。

2 カタカナ語の扱いについて

カタカナは漢文訓読の際のレ点やヲコト点から始まり、漢字を和訓するために狭い行間に省略した真仮名を使うようになったことで十世紀半ばに独自の形ができあがったとみられている。

現代では擬声語、擬態語、動植物名のほか、主に外来語の表記に用いられ、カタカナ語＝外来語とイメージする人も多いが、日本語を書き表す手段として平安時代後期には漢文訓読から独立して、文章を綴るのにも用いられていた。